

## 再び「翻訳」を考える

浜田 道雄

先に「外国語で書かれた詩の翻訳を考える」という一文をHPに載せたところ、大阪のYさんから鳥飼玖美子さんが書かれた「歴史をかえた誤訳」という本があると教えていただいた。

鳥飼さんは人も知る英語同時通訳の権威。その長い経験から面白い通訳や翻訳、誤訳のエピソードがいろいろと語られているものと思い、早選手にとってみた。しかし豈図らんや、これは結構ガッチリとした鳥飼さんの「翻訳・通訳論」で、中身はまとまりのあるたいへん面白い読みものだった。そしていろいろと教えられた。

ところで、私の先のエッセイのテーマであった「異言語間の詩は翻訳できるのか」という疑問を、鳥飼さんもこの本のなかで論じている。例として取り上げているのが、日本の詩歌史上有名な俳句、芭蕉の「古池やかわず飛び込む水の音」の英訳だ。二人の訳者はどちらも高名な文学者であり、日本文学研究者でもあるラフカディオ・ハーンとドナルド・キーン。

ハーンはこの句を

Old pond-frogs jumped in-sound of water

と訳し、そしてキーンの訳は

The ancient pond

A frog leaps in

The sound of water

である。

まずは、私の個人的感想を述べておこう。私はこのお二人の訳がこれまでにどのような評価を受けているのかは知らない。だが、私は正直がっかりした。どちらの訳からも、芭蕉の発句の文脈で最も大切なものである（と私が考える）「風景のなかの静寂とそれへの敬虔なる敬意」あるいは「禅の境地に似た静けさ」がまったく伝わってこないのだ。

私は「古池や」という初句にこそ、この深い「静寂」を感じさせるものがあると思っている。英語を母国語とする人々は、この初句の訳語「Old pond」あるいは「The ancient pond」を読んで、私の期待する「深い静寂」を読み取ってくれるだろうか？ あるいは句全体からでもいいのだが、この俳句の伝えようとしている「静かな情景」を思い浮かべてくれるだろうか？

私のこれまでの英語圏の人々との付き合いから、あるいは英米文学作品を読んで得た経験から、彼らがそれを読み取ってくれることはまずないと思う。単純に「どこかの澱んだ池」と思うだけではなからうか。

鳥飼さんは私の論点とは違った観点から、このお二人の訳詩には言語のニュアンスのうえで問題があるという。それは「カワズ」という語の問題だ。「カワズ」は「frog」と訳されている。カワズ=カエルは日本でも英米でも身近で普通に見られる生き物だから、日本人であろうと英米人であろうとすぐに日常的にあるイメージを浮かべることができるだろう。

しかし、鳥飼さんは日本の人々と英語圏の人達とはカワズ=frog にはまったく違ったイメージを持っていると指摘している。英米人の「frog」のイメージは「滑稽なもの」、「軽蔑すべきもの」、「バカなやつ」などとカエルを軽ろんずるところが強いという。そういえばイソップ童話には、牛と身体の大きさを競って腹を破裂させたカエルや、ゼウスに強い王様を欲しがって蛇を送られ、結局みな飲み殺されてしまった話がある。しかし、私達日本人はもちろん、カエルにそんな「馬鹿者」といったイメージは持たない。

「古池」や「カエル」の語感にこれだけ大きな差があるとなると、やはり英語圏の人々にこの俳句から芭蕉の伝えたかった「詩境」を感じ取れというのは難しいだろう。私はますます詩歌の異言語への翻訳は無理ではないかと考えるようになった。

とはいえ、外国語の詩を日本語に翻訳したという反対の例になるが、上田敏の「海潮音」に収められたブラウニングの「春の朝」やカール・ブッセの「山のあなた」などの訳詩は、日本語の詩として十分鑑賞に耐える立派な作品だ。だから、一概に異言語の詩歌の翻訳を不可能だときめつけるわけにはいかないともいえる。もっとも、この上田敏の詩はブラウニングやブッセの詩の「訳」ではなく、彼らの詩心に触発されて上田敏が書いた「作品」とみればまた別だ。

今後 AI 技術がどんどん進歩して、やがては翻訳能力も人間を超えるようになると主張する人はいる。そうなれば、この芭蕉の句ももっといい訳ができるかもしれないと。

しかし、言語はそれぞれの民族の長い歴史のなかで育まれた固有のニュアンスをもっているものだ。そんな人間の感性に関わるどころまで AI 技術がしっかりと把握して、翻訳できるようになるだろうか。私は懐疑的である。できるようになるとしてもそれは何世紀も遠い先の未来世界でのことだろう。

それ故、私は依然として詩歌の翻訳、つまり異文化への移し替えは難しいと思う。外国語の詩歌はできるだけ元の言語で読むのがいい。たとえ、その詩のもっている「詩情」を十分には読み取れないとしても。そう私は思うのだ。

(2021・10・02)